



2019年1月24日「奥浅草だより」第20号

## 観音ウラの粋と味

**オモテ浅草から観音ウラへ** 浅草寺の裏手の言問通り沿いに赤い旗の「みちびき地藏尊」やゴロゴロ会館があります。その奥は、浅草3丁目、昔の象潟町（きさかたまち）です。江戸期に、秋田・本庄藩宅がありました。明治になって浅草寺境内にあった料亭や小売店がこの地区に移転をさせられ、花柳界がつくられました。その中心にあるのが浅草見番（検番）で、ここでは登録してある芸者や幫間を料亭や待合に紹介します。東京の六大花街とは、日本橋人形町、新橋、赤坂、神楽坂、向島、そして浅草で、今は数少なくなった芸者を通じて、江戸文化を伝えることも大切な役目です。各所の見番や組合事務所は、催しものの会場や稽古場を通じて、伝統芸能を披露しています。

**東京最高齢芸者** 「浅草ゆう子」は1923年生れで、13歳から芸者見習い、20歳で独立し、以来、94歳（2017年）になるまで80年間も舞台に立ち、今も健在です。『いつでも今がいちばん』（世界文化社 2013年）という著書では、浅草芸者の心意気を披瀝しています。

**粋な界限** 花街は、昭和初期までは芸者の数も増え、浅草芸者は1,000人もいたそうです。また戦後の高度経済成長期には、料亭や小料理屋、さらに客用土産の佃煮屋や菓子店などが建ち並び、黒塗りのハイヤーが集まるほどでしたが、バブルがはじけてからはその賑わいを失いました。高級料亭の時代は去り、店は減り、客足は遠のきました。ところが今、料理屋の味は消えることなく、若い人たちを集めています。インターネットは思わぬ人集めをするものです。

**老舗料亭街の味** この地区の食事処は幅広く、小料理、そば、洋食、カフェなどが、小さくしっかりと営業しています。いつも満席の釜めし、ふぐやのすっぽんカレー、抹茶のジェラードなど、人気のある店はそこかしこにあります。どこへ入っても間違いのない味に出逢えるのは、この旧・象潟町ならではのことでしょう。

この「奥浅草だより」は『奥浅草 地図から消えた吉原と山谷』の発行後話題を拾って不定期に発行しております。

サノックスのホームページでもご覧いただけます。<http://www.sanox.co.jp>

佐野陽子・江原晴郎・森下恒子.